

菊地匠 | Takumi KIKUCHI

"In Pause"

2019年5月2日(木) - 5月14日(火)



1991年栃木県足利市生まれ。2017年東京芸術大学大学院美術研究科芸術学専攻修了。現在東京にて制作活動中。2017年サロン・ド・プランタン賞受賞、個展「朝には消えていた天使」(GALLERY 風)

真っ白なキャンバスに飛び散るカラフルな絵の具が、なにか像を結ぼうとしている。「拭き取り(wipe-off)」という技法で描かれたものだ。鮮やかな配色は意図的ではあるものの、質感はどこか雑然とし、まるで暗がりですべてがぼやけているようにも見える。

郷里での初個展である菊地が今回下敷きとした『生のなかば』の作者である詩人フリードリヒ・ヘルダーリン(1770-1843)は、自身の人生において絶望と苦難に満ちていた。『生のなかば』の詩は憧れのギリシア神話がモチーフとされ、明るく躍動感溢れる前半と、暗く荒廃した風景が続く後半で構成されているため「ミッドライフクライシス(人生半ばの危機)」を扱う作品とし長年評価を受けてきた。しかしヘルダーリンは失われた音節アドニス格、寓意的な言葉や独特の韻律、さらに独自の哲学的観点を用い、明るさから暗さへの単純な主従関係ではなく、互いを否定しつつ補完するという不思議な鏡像的关系を築いたのである。つまり前半から「不穏」なのだ。とくに詩行にアクセントを加えるはずの「中間休止」は、リズムに逆らう中断として生まれ変わり、前半から後半までの心地よい流れや意味の繋がりを幾度となく妨害している。

菊地はこの読みにくさに着目した。一字一句に省察を繰り返し、逡巡しながら進む異常なまでの精密さが「触れることが不可能」な対象に向き合う唯一の方法としたヘルダーリンの姿勢に、菊地は共鳴したのだ。暗がりのなか感覚のみで仕上げたかのような菊地の作品は、色の配置や線の質感、拭き取る行為までも、実は正確性に満ちている。描写することのそれではなく、存在の正確性ともいうべきもので、描かれうる存在の危うさを示そうとしている。

その正確性はいったい何に結びつくのだろうか。それは「今」をどう捉えるか、であろう。人は時間や空間の管理の可能性を信じて疑わないが、「今」と言った瞬間にその「今」は過去へと追いやられている。そうした立ち位置の不安定さや非内面的な眼差しから、失われた歴史や伝統を読み直すことを菊地は一貫して行っている。

ヘルダーリンが憧れたギリシアや生の歓びは、彼の病とともに心のうちに終焉したが、今回の個展はその失われたものと鏡像的关系にあるのかもしれない。作家菊地はこれからも「今」という時間からなにを掬い上げ、我々に見せてくれるのだろう。

朝倉学